

「暴力とお金で動く組織には、同じく暴力とお金で動く組織でしか対抗できないのね。非合法の火力と資金で、それでもこの街は守られた……」

そこでアリシアは、お話は終わりとはばかりに息をついた。

だが、灯里には到底受け入れられない話だった。それもそうだ。

「——だって、そんな組織があるなんて、私、聞いたことありませんよ……エイブル・フルなら、まだまだ先ですよ……？」

凶悪事件のニュースすら聞かないこの街で、犯罪組織だなんて。

悪い冗談にしか、聞こえない。

いくら灯里が問い質しても、アリシアは「全部嘘よ」などと、言つてはくれなかった。

普段は見せない悲しげな表情で、ただ、黙っているだけだった。

結局のところ、『観光都市』に犯罪組織が巣食っているなどという話は、その産業に致命的なダメージを与えてしまう。だから、この街の犯罪組織は——ネオ・ヴェネツィアン・マフィアは、深く深く深海へと潜り、表の世界から一片の欠片さえも消し去った。

裏の世界で、この街を牛耳る存在があると知られるだけ。

ネオ・ヴェネツィアン・マフィア『三途案内』ファミリアは、この街を出入りするすべての情報を監視し、制御し、統制し、住民をもその内に取り込み、最早この街そのものだとと言ってもいい。

アリシアが脇にどいた。

灯里はマフィアの頂点、ゴッド・マザーと相對する。

それがネオ・ヴェネツィアの裏の顔。どす黒い、凶暴なまでの異相。この街が自衛のために身に着けた力。

あまりの狂気に眩暈を覚え、倒れそうになる。しかし灯里は両脚に力を籠め、その相貌を正面から受け止めた。

人殺しをも厭わない黒衣の犯罪集団。存在そのものが秘匿されているが故に、それを知った者の運命は二つしかない。

アリシアは昔話の後、小さな回転式拳銃を取り出した。灯里の目の前で弾薬を籠め、彼女は問うた。

——死するか、同化するか。

己の手を血に汚す覚悟がなければ、今ここで、自分の手で終わらせてあげる——と。

とてもではないが、信じられるほどの材料は揃っていない。冗談だと言われたほうがまだ信じられる。

だが——アリシアのその表情は不思議な説得力に満ちていた。何よりも、彼女のその言葉が証拠であるかのように。

だから灯里は逡巡の後、躊躇いながらも答えた。
この大好きな街を、素敵な街を護るためなら、

——どんな汚濁をも呑み込んでみせると。

ゴッド・マザーが片手を挙げる。それに応じて、新たにランプが点された。中央よりもやや手前。新たに生じた橙円に、一人の男が浮かび上がった。腕かされた彼は後ろ手に縛られ、幾つもの青痣が顔に浮かんでいる。

彫りの深いロシア系中年男性。人相はよく見えないが、左目の下にナイフ傷は確認できた。足元から絨毯が取り除かれ、彼は大理石に敷かれたビニールに座らされていた。

「話は聞いてるわね？」

ゴッド・マザーが問う。

灯里はそれに無言で頷き、拳銃を取り出した。数時間前に、アリシアが彼女へ向けた銃。重い、重いと聞いていた実銃は、思ったよりもずつと重かった。

裏の世界へ、深海の世界へ潜るのであれば——皆の前でその手を汚して見せよ。

撃鉄を起こす。弾倉が回転する。

かちりと、人殺しの準備が出来たと銃が告げる。
アイズブルーの男の瞳が、一瞬だけ灯里を見る。

——よく狙え。